様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ２３０５１

研究課題名（和文）フランスにおける古典主義とロマン主義の相克－18世紀文学を補助線として

研究課題名（英文）Conflicts between classicism and romanticism in France: through the prism of 18th century literature

研究代表者
鈴木　和彦（Suzuki, Kazuhiko）

明治学院大学・文学部・准教授

研究者番号：９０８４６０１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：１９世紀前半に隆盛をみたフランス・ロマン主義文学の思想的展開をたどるべく、とりわけ1830年代を中心に古典主義とロマン主義がどのような敵対関係のなかで各々の自己像を形成していったかを明らかにした。具体的には、サント＝ブーヴやユゴーらがアンドレ・シェニエやジャン＝ジャック・ルソーらの作品をどのように理解したか、あるいは、ボードレールを事例としてロマン主義詩がどのような発展を遂げたかを明らかにした。さらに、19世紀の文学史家デジレ・ニザールが18世紀までのフランス文学史のアプローチを刷新しつつ、いかにして古典主義の再生を企図していたかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来のロマン主義研究では特定の作家を対象とする作家研究が主流であったのに対し、本研究では特定の作家ではなく、ロマン主義時代全体を形成した多くの作家や批評家の言説に着目した。これにより、ロマン主義という概念がロマン派の勝利宣言のなかだけに見出されるのではなく、さまざまな言説のダイナミズムのなかで形成されたことを明らかにした点に本研究の学術的意義がある。また、ロマン主義という文化潮流が、ひとえにロマン派という歴史の勝者だけでなく古典派という敗者の言説によっても形成されていたという事実を明らかにする本研究は、歴史一般の成立を再考するうえで有意義であり、この点において社会的意義をもつものである。

研究成果の概要（英文）：In order to trace the ideological development of French Romantic literature, which flourished in the first half of the 19th century, we clarified the antagonistic relationship between classicism and romanticism, especially in the 1830s, and how each formed its own image. Specifically, we clarified how Sainte-Beuve, Hugo, and others understood the works of Andre Chenier and Jean-Jacques Rousseau, and how Romantic poetry developed with Baudelaire's poem as an example. Furthermore, we elucidated how the 19th century literary historian Desire Nisard planned to revive classicism while renewing the approach to the history of French literature up to the 18th century.

研究分野：フランス文学

キーワード：ロマン主義　ニザール　サント＝ブーヴ　ユゴー　ボードレール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

従来の 19 世紀ロマン主義文学研究においては、一部の作家を除き、啓蒙の世紀と呼ばれる 18 世紀文学と 19 世紀のロマン主義文学との思想的連続性はさほど強調されてこなかった。また、ロマン主義研究においては、特定の作家のみを対象とする作家研究が今なお主流のアプローチと言える。それゆえ 19 世紀前半の作家・文学者が、18 世紀以前の文学作品や文学史観をどのように理解した上でロマン主義という思想形成の糧としたかを理解する必要がある。また、ロマン主義時代全体を捉えるうえでは、個別の作家研究ではなく複数の作家を研究対象とする横断的なアプローチが必要である。

２．研究の目的

本研究では、ジャン＝ジャック・ルソーはじめとする 18 世紀作家の作品や、19 世紀における古典派作家の言説の調査を通じて、19 世紀の作家が 18 世紀文学をどのように理解していたのかを検討し、また古典派とロマン派の論争を再構成することで、19 世紀前半に隆盛をみたフランス・ロマン主義文学の思想的展開の要諦を明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法

研究方法としては国内図書館所蔵の一次資料の調査と並行して、採用期間において毎年１度のフランスでの現地調査を予定していたが、コロナウイルスの影響によって渡仏計画を大幅に変更せざるを得ない状況となった。渡仏に関しては、2023 年度末に現地調査を行うことができた。具体的には、18 世紀のルソーらの文学作品や、19 世紀前半において 18 世紀文学を参照しつつロマン主義批判を展開した古典派の批評家の文学論などを中心に調査を進めた。

４．研究成果

本研究機関に得られた主な研究成果を（１）『エルナニ』の相対化をめぐる研究（２）古典主義の刷新をめぐる研究（３）サント＝ブーヴの詩における批評性の研究（４）ボードレールの詩におけるレトリックの研究、の４点に分けて記述する。

（１）『エルナニ』の相対化をめぐる研究

ロマン主義史においては、1830 年のヴィクトル・ユゴーの戯曲『エルナニ』上演の成功をもってロマン主義が古典主義を打倒し、その優位を不動のものとしたとされてきた。近年のフランス文学史においてもそうした記述が散見される。本研究では 1830 年代に出版された文学作品や文学論、ならびに新聞雑誌の調査をつうじて、従来の文学史観において特権的な地位を与えられてきた『エルナニ』伝説を相対化しつつ、1830 年代の古典主義とロマン主義をめぐる諸問題を七月王政初頭の社会的・文学的の実情に照らして整理した。

古典主義とロマン主義の対立に暫定的な終止符を打った要因としては、『エルナニ』よりも、この戯曲初演の約半年後に勃発した七月革命を挙げるほうがより史実に正確であると言える。実際に、文学の趨勢をめぐる言説を形成する主要メディアとして機能していた新聞雑誌において、七月革命以降、古典派とロマン派の文学論争は下火となっている。革命という社会全体を揺るがす動乱の時代にあっては、当然ながら文学をめぐる言説そのものが取り沙汰されなくなったのである。革命後の『フィガロ』誌には古典派とロマン派の停戦協定を求める記事が掲載されており、そこでは、七月王政が樹立し資本主義経済が加速の一途を辿る昨今における喫緊の課題は「芸術家」と「ブルジョワ」の対立をどう解消するかであり、文学を志す輩が「古典派」と「ロマン派」に分かれて対立している場合ではないという論説が述べられている。「ブルジョワ王政」とも呼ばれる七月王政下においては、バルザック『幻滅』やヴィニー『チャタートン』、ゴーティエ『モーパン嬢』序文などに描かれるように、文学の自律性が自明のものではなくなり、それゆえ古典派とロマン派はもはや復古王政期に繰り広げた論争の延長戦に興じていられる余裕はなくなっていた。

むろんロマン主義の歴史において『エルナニ』が果たした意義を否定することはできないが、上記のような 1830 年代前半の状況を省みると、一作家の物した戯曲の成否以上に、七月革命という歴史的出来事とそれがもたらした資本主義社会の到来のほうが、はるかに古典派とロマン派の文学論争の行方を左右する分水嶺となったと言うことができる。

（２）古典主義の刷新をめぐる研究

1830 年代に入ると七月革命とともに復古王政期の文学論争は一旦下火となるが、革命から数年ののちに再燃することになる。その火付け役となったのが古典派の若き批評家デジレ・ニザールである。ニザールはラマルティーヌやユゴーらの作品が体現するロマン主義が好評を博し、17 世紀を頂点とする古典主義文学を過去の遺物としつつある世の趨勢を危惧し、古典主義の刷新を図っていた。本研究では、古典主義の自明性が危ぶまれつつあった 1830 年代前後に、ニザールが『討議新聞』や『国家』といった新聞に発表していた記事や 1834 年の著作『頽廃期のラテン

詩人の風俗および批評研究』、あるいは後年に刊行した『フランス文学史』といった文献の調査を通して、この批評家が企図した古典文学再生の要諦を明らかにした。
具体的には、ニザールは「風俗研究」の手法を用いることでラテン文学の理解を刷新しようとしていた点を論じた。従来の古典文学研究が文献学的アプローチを旨としていたのに対し、ニザールは作者の人となりや当時の社会風俗などに照らして作品を読み解く風俗研究を採用した。風俗研究とは、バルザックの著作に代表されるように、1830 年代当時としては流行の研究方法であり、いわば「ロマン主義的な」アプローチであった。つまり、ニザールは彼が敵視するロマン主義の手法を換骨奪胎して古典主義研究を刷新しようとしていたことが明らかになった。本研究から、古典主義とロマン主義が相反する両極の立場を固持していたのではなく、互いに影響を与え合い相互侵食的に自己像を形成していた事実が判明した。

（3）サント＝ブーヴの詩における批評性の研究
本研究では 19 世紀を代表する批評家として知られるサント＝ブーヴの詩作品と詩論の読解を通じて、サント＝ブーヴが目指したロマン主義の超克の要諦を明らかにした。サント＝ブーヴは批評家として言及されることの多い作家だが、詩人として数冊の詩集を発表してもいる。サント＝ブーヴの詩についてはフランスでも日本でも論じられることは少ないが、詩作品の読解によって、サント＝ブーヴが同時代のロマン主義詩学を批判的に乗り越えようとしていた点を明らかにした。
具体的には、シャトーブリアンやユゴーといったロマン主義者たちが「偉大さ」や「崇高」といった概念を主題とするのに対し、サント＝ブーヴ作品を特徴づけているのは、主題の面でも形式の面でも、「小ささ」であることが明らかになった。主題の面では、風光明媚な風景を求めてヨーロッパやアメリカを股にかけた同時代の詩人たちとは異なり、サント＝ブーヴはパリ郊外の殺風景な自然を描いた。こうした企図の裏側には、『新エロイーズ』や『告白』などの作品を通して人間と自然の関係をめぐるロマン主義の詩学の雛形を生み出した 18 世紀の作家ジャン＝ジャック・ルソーに対する批判意識を読み取ることができる。形式の面では、サント＝ブーヴは 16 世紀のプレイヤード派が用いて以降はあまり顧みられることのなかった僅か 14 行からなる「ソネット」という詩型を復活させた詩人の一人であると言える。以上の 2 点から、サント＝ブーヴのもつ「小ささ」とは、ひとえに非力さの証ではなく、むしろ同時代のロマン主義詩学に対する批判意識の表れとして理解できる点を明らかにした。

（4）ボードレールの詩におけるレトリックの研究
本研究では 19 世紀に活躍した詩人ボードレールの詩集『悪の華』に収められた作品読解を通して、ロマン主義時代を締めくくるこの詩人のレトリックの分析を行った。具体的には、部分によって全体を、または全体によって部分を表わす修辞技法である「換喩」というレトリックの考察を行った。まずボードレールの詩における換喩には「形見」としての機能がある点が指摘できる。フランス語において「形見」とは relique というが、この語にはまた「聖遺物」（キリスト教の伝統において聖人の身体の一部や聖人が身につけていたものを指す）という意味がある。本研究では、キリスト教美術とロマン主義文学をつなぐ領域横断的アプローチによって、換喩の分析を通じて、ボードレールが、社会全体から信仰心が失われていく 19 世紀という時代において、聖俗のあいだをつなぐ紐帯としての詩作を行っていた点を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木 和彦	４．巻 115
２．論文標題 『エルナニ』から少し離れて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 フランス語フランス文学研究	６．最初と最後の頁 143～159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/ell f.115.0_143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 鈴木和彦
２．発表標題 形見としての換喩
３．学会等名 ボードレール―詩と芸術
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木和彦
２．発表標題 サント＝ブーヴの詩における批評性について
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木和彦
２．発表標題 1830年代の反ロマン主義ーデジレ・ニザール『頽廃期のラテン詩人の風俗および批評研究』から
３．学会等名 フランス・ロマン主義の歴史的展開についての研究―文学、政治、美学（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 クリスチャン・ドゥメ、小川美登里、鳥山定嗣、鈴木和彦	4．発行年 2020年
2．出版社 幻戯書房	5．総ページ数 232
3．書名 三つの庵	

1．著者名 ジェラール・マセ、鈴木和彦	4．発行年 2020年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 168
3．書名 オーダーメイドの幻想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

明治学院大学 研究者情報
https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?resId=S000480

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関